

論 文 概 要

○ 論 文 題 目 陽子線治療に臨む子どもの母親が抱く思い

○ 指 導 教 員

人間総合科学研究科看護科学専攻 岡山 久代 教授

(所 属) 筑波大学大学院人間総合科学研究科看護科学専攻(博士後期課程)

(氏名) _____ 小澤 典子 _____

目的：

本研究の目的は、陽子線治療を受ける子どもの母親が、陽子線治療を受けることを決意し治療に臨むまでに、治療を受けることに対してどのような思いを抱いているのか、その構造とプロセスを明らかにすることである。

対象と方法：

陽子線治療を受ける 1 歳から 6 歳の子どもの母親を対象とし、調査施設は小児の陽子線治療を行っている 1 施設とした。子どもの主治医もしくは看護師長より、対象者の紹介を受け、文書および口頭にて研究説明を行い、同意を得た。

陽子線治療全体の 4 分の 3 が終了した以降に、母親に対してインタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した。インタビュー内容は、IC レコーダーに録音した。また、フェイスシートおよび子どもの診療録から、子どもの属性に関する情報収集を行った。録音したデータから逐語録を作成し、Grounded Theory Approach を用いて質的機能的分析を行った。

本研究は対象施設の臨床研究倫理審査委員会へ申請し、承認を得てから実施した。

結果：

13 名の母親から同意が得られ、インタビューを実施した。全ての子どもが転院をして陽子線治療を受けていた。

陽子線治療を受ける子どもの母親が陽子線治療に臨むまでの思いに関する現象として【将来への不安の押し寄せ】という現象が明らかになった。この現象は、《救命の先に将来の生活を思い見る》という状況から、《照射開始までに病状が進行する不安》《唯一無二の治療であるという陽子線への期待》《転院による困難さを乗り越えてでも子どもを支える覚悟》【将来への不安の押し寄せ】という行為/相互作用を経て、《ぎりぎりまで悩む治療選択》《気持ちの中心を不安から治療に切り替える》《前向きな気持ちでの取り組み》《仕方のない X 線》《救命優先の手術》といういずれかの帰結に至るという現象であった。

放射線治療という治療選択を迫られた母親が、治療による子どもの救命は最優先事項ではあるが、治療による晩期合併症を心配するという《救命の先に将来の生活を思い見る》ことから展開する現象であった。母親は、陽子線治療の情報を獲得し、陽子線

治療に利点を感じることで「唯一無二の治療である陽子線治療への期待」を抱き、陽子線治療の選択に至るというプロセスが明らかとなった。陽子線治療を受けるためには転院が必要なことに対して困難さも抱くが、家族からのサポートを獲得するなどして「転院による困難さを乗り越えて子どもを支える覚悟」を高め、困難さを乗り越えようとするプロセスがみられた。期待や覚悟を高め治療に臨もうとする母親であるが、治療直前になり、改めて陽子線治療でも避けられない晩期合併症があることと直面し【将来への不安の押し寄せ】という行為に至っていた。不安が高まる中で、差し迫る治療に向けて「気持ちの中心を不安から治療に切り替える」という帰結に至るプロセスと「前向きな気持ちでの取り組み」という帰結に至るプロセスが明らかになった。また、治療選択に迷いが生じた母親は、治療選択後に「照射までに病状が進行する不安」が出現し、「ぎりぎりまで悩む治療選択」という帰結に至ることもあった。

考察：

放射線治療は、子どもにとって重大な晩期合併症を引き起こしやすい治療である。本研究の母親も、子どもの予後や子どもの生涯にわたる生活への影響を心配し、放射線治療への恐れが高いことが推察された。先行研究と比較すると、治療開始前から、治療が及ぼす子どもの将来への影響に対して不安を高めているという状況は、陽子線治療を受ける子どもの母親の特徴であると考えられた。

放射線治療への恐れが強い母親は、陽子線治療への期待が強く、その分、治療前に現実的な問題に向き合った際の不安の増大は高いことが推察された。加えて、陽子線治療を受けるためには転院が必要なが多く、転院前に適切な情報を医療者から獲得しにくいという状況が、治療直前の不安の押し寄せの要因の一つであることも考えられた。情報獲得のしにくさは、陽子線治療選択のプロセスにも影響しており、医療施設の垣根を越えた医療チームを組成し、情報提供の充実をはかっていくことが急務だと言える。

また、母親には、転院により生じる家族役割の変化に対する困難感を抱いているという特徴もみられた。困難感とは、子どもを支える覚悟や家族の凝集性といった強みにつながるが、一方で、情報獲得のしにくさやソーシャルサポートの減少が不安の増大に影響しており、母親への心理的支援を考える上では重要な視点であることが示唆された。

最後に、不安が増大した母親が折り合いをつけて治療に臨んでいくというプロセスには、治療選択を振り返り、母親自身が陽子線治療に意味づけを行って治療に臨むという行為が影響していた。治療選択への意味づけは、治療に臨む際の行動に影響することが示されており、陽子線治療を受ける子どもの母親への心理的支援としても有効であることが示唆された。

結論：

母親が抱く放射線治療に対して抱く恐れは、陽子線治療を受ける過程で母親が常に持ち合わせているものであり、陽子線治療に臨む母親の心理的状況や意思決定を左右する概念であることが明らかとなった。放射線治療に対する恐れは、陽子線治療を決定する時点で軽減するも、転院という状況も相まって、陽子線治療前に再度増大することが明らかとなった。治療選択から治療に臨むまでの期間における、母親の心理的状況の変動は大きく、また、不安の高まった状況で治療に臨んでいるという母親の状況を踏まえると、母親への心理的支援が重要であると言える。